

抄録

「視線入力」をとりまく環境は、2014年のローコスト視線入力装置によって激変しました。

もともと、視線入力装置は軍事用として使われてきました。その後、広告や心理学分野で広く使われるようになり、その他の分野への応用が進みました。重度障害者向けの意思伝達装置としての応用もその流れで実現し、「トビー」で知られる視線入力装置が発売されるにいたりました。

視線入力装置の教育およびコミュニケーション利用における効果はてきめんで、欧米においては重度障害者の標準的な支援機器となっています。しかしながら、高価であることが大きな問題となっており、必要とする人のすべてが利用できるわけではありません。それはどの国でも同じことでした。

2014年、「トビー」の Tobii 社が発売したゲーム用視線入力装置 Tobii EyeX Controller（以下、EyeX）は、高価な視線入力装置と遜色ない性能を持っていました。当然、福祉用途への期待が高まったのは言うまでもありません。それ以降、無料の意思伝達ソフトであるハーティエラダーがいち早く EyeX に対応し、miyasuku EyeCon などの登場もあって視線入力環境が整いやすくなりました。

誰もが視線入力環境を使えるようになったものの依然として問題はありました。どのように設置して、どのように使いはじめればいいのか、利用者やその周辺の人が考えなくてはならなかったのです。「トビー」であれば、販売会社によるサポートが受けられますが、EyeX をはじめとするローコスト視線入力装置はそうもいきません。

特に、固定具についてはトラブルが頻発しました。しっかりとした固定具を使わないことによる精度不良が利用者を悩ませたのです。ソフトウェアについても同様です。その選定と設定を自らが行うには「安いから」というだけで飛びついた人々を大いに困惑させました。

高価であったために入手できなかった人々に福音であったはずの低価格な視線入力装置。機械に詳しい人にとってはよかったものの、それ以外の人にとっては可能性を感じながらも使いこなせない代物となってしまったのです。

そこで本報告では、現状のローコスト視線入力装置およびそれに対応したソフトウェアについてまとめ、事例を通してどのように使われているかをまとめました。巻末のコラムでは、ローコスト視線入力装置の購入方法を皮切りに、固定具のはなしや少々学術的な資料も掲載し、より深く視線入力について知ってもらえるようにいたしました。

視線入力はごく初期の ALS 患者さんにも有効ですし、もっと言えば健常者にも便利に使える道具です。まだまだ先入観が拭えない道具ではありますが、今後どんどん使われていくに違いありません。それは、先駆的な視線入力の利用者たちが実によく示しているのです。